

ぜん 全

しん 進

全員で 進もう!



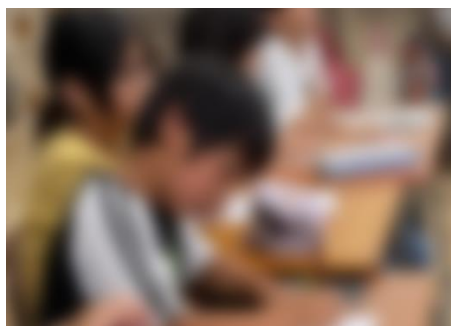
確かな学び通信
2026.8.27

平和集会

例年8月6日に行っていた平和集会ですが、今年度は2学期の初めに行いました。夏休み中だと欠席する児童もいるため、多数の児童が参加できるこのタイミングで行うのもありだなと感じました。池田市では修学旅行で広島を訪れ、平和学習を行います。そこでの学びが子どもたちにとって意味のあるものになるためには、全学年で行われる平和学習が大切なのだと思います。全ての学年クラスはまわることができませんでしたが、今日の平和学習の様子を共有いたします。



全学年での平和集会では、最初の先生からの話が始まってから空気が変わり、真剣に集会に取り組もうとする雰囲気が伝わってきました。阿比留先生の話、広島6年生の誓いの言葉、折り鶴と、子どもたちが真剣に受け止めていたように思います。



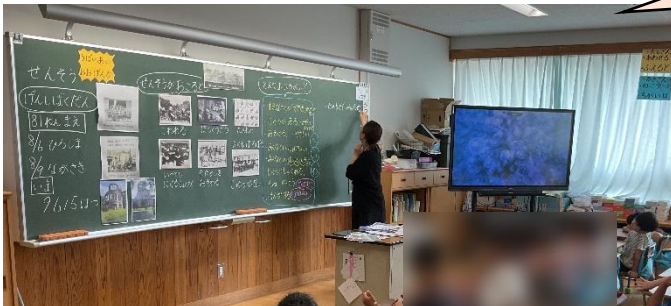
多くの学年・学級で、絵本や資料などを活用しながら平和学習が行われていました。「平和＝戦争がない」という捉え方だけで終わるのではなく、「自分たちにとって平和とはどのような状態なのか」「身近な地域にとっての平和とは何なのか」と、一人ひとりが自分ごととして真剣に考えている姿が印象的でした。

平和学の父と呼ばれるヨハン・ガルトゥングは、平和について「消極的平和」と「積極的平和」という二つの概念を提唱しています。「消極的平和」とは、戦争や武力紛争、物理的な暴力がない状態を指します。一方、「積極的平和」とは、戦争がないだけでなく、貧困や飢餓、差別、人権抑圧などの「構造的暴力」や「文化的暴力」もない状態を指します。

こうした視点に立つと、平和学習は戦争や過去の出来事について学ぶだけのものではなく、自らの生活や身近な地域にある課題に目を向け、「自分には何ができるのか」を考えることも、平和について学ぶ大切な一歩になると思います。そして、そこから差別や人権、貧困など、さまざまな人権課題に目を向けるきっかけも生まれてきます。

また、こうした学びは、特別活動とも深くつながっています。自分の思いや考えを表現し、友達の考えを真剣に聞き、違いを認めながら、よりよい学級や学校をつくっていく。こうした日々の生活そのものが、「平和」につながる学びとも捉えることができます。

今回、先生方の実践を見せていただき、平和学習を一つの行事や単発の授業として捉えるのではなく、日々の授業や学級づくり、特別活動など、一つひとつの学習をつないで考えていくことが大切だと考えることができました。



☆「語り継がれる」ことは当たり前ではない

平和集会での先生のお話の中で、「祖母が戦争のことを話してくれたのは、90歳になってからだった」という言葉が心に残りました。私自身も、祖父母から戦争について詳しく聞く機会はないまま、亡くなりました。夏の平和学習研修で講師の先生がお話しされていたように、戦争を生き抜いた方々にとって、当時の記憶を思い出し、言葉にして語ることは、想像以上の覚悟がいることなのだと思います。

6月の修学旅行では、被爆体験講話で当時のお話を聞かせていただきました。語り部の方は7人家族で暮らしていましたが、原爆により、自分だけが奇跡的に大きな外傷を免れ、家族は次々と目の前で亡くなっていったそうです。その出来事は、思い出すだけでもつらい記憶だったと話されていました。長い間、家族のことを思うと語る気持ちになれなかったそうです。それでも、「平和を学ぶ若者がいること」「語り部が高齢化していること」を考え続ける中で、自分に問い続けていたと言われました。そしてある日、夢の中でお父さんから「いつまでくよくよしているんだ。今語らないで、いつ語るんだ」と背中を押され、語る覚悟をもつことができたそうです。

このように、戦争体験が「語り継がれる」ということは決して当たり前ではありません。そこには、つらい記憶と向き合い、それでも未来の平和のために伝えようとする語り手の強い覚悟があります。だからこそ、6年生で被爆体験講話を聞く子どもたちには、その覚悟も含めて受け止め、過去の出来事を自分事として考え、これからの平和について考え続ける人に育ってほしいと思います。